

337 教室における潰瘍性大腸炎に対する大腸全摘・J囊回腸肛門吻合の適応と臨床成績

三重大学第2外科

山本純二、松本好市、北川達士、菅谷義範、杉平宣仁、福浦竜樹、入山圭二、鈴木宏志

教室では大腸全摘・J囊回腸肛門吻合を家族性大腸腺腫症3例、潰瘍性大腸炎8例の計11例に行った。全例に回腸人工肛門を併設し、現在までに閉鎖術を7例に行い、閉鎖までの期間は初回手術より平均8ヶ月であった。潰瘍性大腸炎8例の内訳は男3例、女5例であり、全大腸型重症例6例、左結腸型中等症2例で発症より手術までの平均病期期間は3年6ヶ月であった。人工肛門を閉鎖した7例の手術成績は平均排便回数4.6回/日であり、夜間の排便のあるものは2例、時に便失禁のあるものが3例であり、男性例における性機能障害はなく、全例が術後のQOLにほぼ満足している。〔まとめ〕大腸全摘・J囊回腸肛門吻合術の術後の排便機能ならびに性機能はほぼ満足すべきものであった。従ってこの手術の潰瘍性大腸炎への適応は、ステロイドを使用しなければコントロール出来ない症例、あるいはステロイドでコントロール可能であっても1年のうち1/5～1/4の入院治療を要する症例としている。

338 炎症性腸疾患の手術適応と術後成績

神戸大学医学部第1外科

長畑洋司、安積靖友、沼田典久、斎藤洋一

〔目的〕実地臨床上、しばしば炎症性腸疾患の手術適応の決定に困惑することがある。炎症性腸疾患のうち潰瘍性大腸炎(UC)、クローン病(CD)、虚血性大腸炎(IC)、放射性腸炎を対象にして手術適応を中心に検討した。〔対象〕教室および一部の関連施設で経験したUC88例(手術例19例)、CD33例(手術例24例)、IC24例(手術例7例)、放射性腸炎15例

(手術例12例)の計160例(手術例62例)を対象にした。〔成績〕UCの手術適応は穿孔4例、出血1例、急性激症型2例、癌合併3例、難治9例であった。CDの手術適応は狭窄6例、穿孔4例、出血3例、瘻孔形成3例、腹部腫瘤2例、その他6例で病型別では小腸型は100%小腸大腸型は83%が手術を受けていた。ICの手術適応は穿孔5例、狭窄2例であった。内訳は壊死型が4例とも穿孔で、狭窄型5例のうち1例が穿孔を合併し、2例が狭窄で手術を受けた。放射線腸炎の手術適応は瘻孔5例、出血4例、狭窄2例およびイレウス1例であった。〔結論〕炎症性腸疾患では合併症に対する手術が多かったが、個々の症例に応じたきめ細かな手術適応の決定が必要と考えられた。

339 虚血性大腸炎に対する手術適応と成績

神戸労災病院外科

市原隆夫、裏川公章、植松清

(はじめに)虚血性大腸炎の手術適応は緊急から待期手術まで幅広い。術式、成績について検討した。

〔対象〕当科の虚血性大腸炎手術12例を対象とした。〔結果〕対象は壊死型6例、狭窄型6例で、主病変は壊死型は下行結腸、S状結腸各3例、狭窄型は脾弯曲、下行結腸、S状結腸各2例であった。壊死型の術前診断は困難であったが大腸精査のためのUS、CTが有効な1例があった。手術適応は壊死型は急性腹症3例、出血、穿孔、瘻孔各1例、狭窄型は全例狭窄であった。術式は壊死型がいずれも緊急手術で病変部の切除を行い、一次的吻合3例、腸瘻造設3例、狭窄型は5例に病変部切除が行われ、うち1例は腹腔鏡下で行われた。術後経過はいずれも良好で、死亡、重症合併症はない。〔考察〕虚血性大腸炎は急性期で壊死型が緊急手術の、慢性期で狭窄型が狭窄解除の適応となり、壊死型は腸瘻造設が基本であるが、発症早期にUS、CTにより大腸の精査を行い診断、手術すれば一次的吻合が可能な例もあり、低侵襲であることからUS、CTの有用性が示された。また狭窄型は良性疾患で対症的手術であることから、腹腔鏡下手術が適当と思われた。

340 血管新生抑制剤(FR118487)によるラット実験肝癌に対する効果

東京慈恵会医科大学第2外科

石井雄二、稲垣芳則、小川龍之介、柳澤 暁、青木照明
〔目的〕血管内皮細胞増殖阻害剤FR118487の肝癌への効果を検討した。〔方法〕Fisher系雄性ラットにDEN100ppmを12週その後6週間水道水を自由飲水。FR118487の全身投与はalzet浸透圧ポンプを使用。2mg/kg/day、6週間、DEN投与開始時及び2週後から腹腔内投与。局所投与は肝表面に肝癌を確認、その病変部に計10mg/kgを2-3ヶ所に開腹下に計3回局注。18週にて肉眼的、USの腫瘤変化、一般組織、免疫組織学検査(PECAM-1、vWF、PCNA/cyclin)、血清AFPを測定比較。全身投与のDEN投与開始時のFR118487投与群は12週に非投与群と比較。〔結果〕全身投与例12週では肉眼的に明らかな結節性病変を、また組織学的にも異形成を示すが明らかな癌病巣は認めず、18週も癌部の占める割合は低かった。局注でも肝表面病変の縮小傾向を認めた。免疫組織染色では血管増殖を抑制することによる腫瘍への効果であることが示唆された。全身投与例で血清AFP値の低下を認めた。副作用は特に全身投与例で非投与群と比較し12週で約35%、18週で約22%の体重減少。局注療法では明らかな減少は認めなかった。